

---

---

## 編集後記

本書は、2009年9月3日から5日に、チェコのカレル大学哲学部日文学科と名古屋大学グローバル COE グループとが共催した研究発表集会「日本語テキストの歴史的軌跡——解釈・再コンテキスト化・布置」の報告書である。名古屋大学グローバル COE にとっては、「テキスト布置の解釈学的研究と教育」第8回国際研究集会の成果報告ということになる。

美しい百塔の街プラハ旧市街にあるカレル大学は、15世紀半ばに設立された。9月3日(木)と4日(金)の会場となったカレル大学哲学部は、ドボルザークホールなどがあるルドルフィヌム(芸術家の家)とカレル橋に近い場所にあり、ブルタバ川の向かいの丘の上にはプラハ城が展望できる。20世紀はじめにはプラハ言語学派の拠点となった、由緒ある研究会場である。

5日(土)の会場はカレル大学本部のある建物で、日文学科が用いている教室であった。私事にわたるが、2004年9月から2005年1月にかけて国際交流基金から派遣され、この隣の教室で『竹取物語』や『源氏物語』などの日本古典文学と日本文化についての講義を行ったことがある。私にとってはなつかしい場所である。こちらはスメタナホールのある市民会館に近く、大学本部正門の脇にはモーツァルトが「ドン・ジョバンニ」を初演したスタボフスケ劇場がある。

カレル大学日文学科は、東ヨーロッパの日本学研究の拠点として、社会主義時代の苦難をも克服し、多大な研究成果をあげてきた。近年は多くの留学生を日本に派遣し、今回の国際研究集会でカレル大学側の世話人として活躍したマルティン・ティララ氏は、名古屋大学の客員研究員として日本文学研究室に三ヶ月滞在したこともある。ティララ氏は『伊勢物語』の研究をしチェコ語に翻訳を進めているが、多くの日本映画の字幕、また吉川英治『宮本武蔵』のチェコ語訳者でもある。

残念ながら今回は参加できなかったカレル・フィアラ氏は、現在は福井県立大学の教員であるが、『源氏物語』のチェコ語訳を完成し、さらに『古事記』の翻訳を進めている。2009年11月には京都での源氏物語千年記念国際フォーラムに講演者として招待された。2010年に名古屋大学を会場として予定されている日本語学を中心としたグローバル COE 国際研究集会には、今回の発表者であるズデンカ・シュヴァルツォヴァー氏とともに参加してくださる予定である。

研究集会当日の発表者16人による研究報告と活発な討議は、楽しくもまた充実したものであった。古代から現代までに産出された文字テキストを中心とする多様なテキストを素材として、「解釈と布置」を大きな議論の枠組みとしつつ、大学院生たちをまじえた内外の研究者が、自由な視点から論じた。とはいえ、質疑応答を媒介にしつつ、それらは予想以上に相互に関連したテキスト相互関連の様相を示すものとなった。

発表対象となった研究領域の分野と発表者および発表題目は、以下のとおりである。研究集会における発表順とは異なるが、本書に収めた題目と異なるものもあるので、発表当日の題目を記しておく。

\*日本語の文法と言語学について：

- ・釘貫 亨「日本語ヴォイスの歴史的成立と展開について」
- ・深津周太「日本語指示詞の感動詞化——その異例としての「アレ」」
- ・松澤和宏「ソシュールの翻訳と解釈——時枝誠記・三浦つとむの『一般言語学講義』批判をめぐって」

\*少女マンガと現代小説について：

- ・アンナ・クジヴァーンコヴァー「少女の進化論——少女漫画における主人公の変化」

---

・重見晋也「ハイパーテキストによる物語の生成——筒井康隆『朝のガスパール』と中野独人『電車男』の比較から」

\*和歌とその翻訳について：

- ・ツベタナ・クリステワ「翻訳が促す和歌の特徴、和歌があらわす古代日本人の思想」
- ・玉田沙織「和歌の受容と翻訳——文化的コンテキスト共有化のために」
- ・ズデンカ・シュヴァルツォヴァー「翻訳しにくい小町の歌」

\*平安朝の物語と宗教テキストを含む絵画について：

- ・マルティン・ティララ「歌物語の中での理想的な男性像と恋愛のパラダイム」
- ・高橋 亨「『源氏物語』解釈と後宮文化の異文化コンテキスト」
- ・阿部泰郎「聖徳太子絵伝の世界像——平安朝における太子信仰テキストの複合的生成とその布置」
- ・青木慎一「スパンサーコレクション蔵の奈良絵本源氏物語について——挿絵の場面選択にみる物語解釈」

\*日本の歴史と思想について：

- ・古尾谷知浩「日本古代における律令規定と行政文書——災害による租税免除をめぐる」
- ・ダヴィッド・ラブス「幕末時代の儒者の「解釈」的なアプローチについて」
- ・池内 敏「于山島考——文献・古地図および研究史の整理」
- ・石井紫郎「思想とテキストの間——日本学生野球憲章の改正作業の現場から」

これらの多彩な研究発表を窮屈な理論の枠にはめることなく、その討議の過程から、自ずから「テキストの解釈と布置」また再解釈による「再コンテキスト化」の問題が浮上したといえよう。

それぞれの詳細な内容については、各論文を参照していただきたいが、多かれ少なかれ論文化に際して質疑応答をふまえた加筆推敲がなされており、より充実したものとなっている。発表者のうち、ツベタナ・クリステワ氏は、西洋と日本と双方にわたる日本文学や日本文化の研究者として、研究発表集会においては活発な発言により、カレル大学側との議論を架橋してくださった。ブルガリア出身のクリステワ氏は、現在は国際基督教大学（ICU）で日本人学生に和歌を中心とした日本古典文学を教えており、『とはず語り』と『枕草子』のブルガリア語訳者でもある。

また、石井紫郎氏は急な体調不良によりプラハでの研究集会には参加していただけなかったのであるが、開会の辞を述べたグローバル COE プログラム拠点リーダーの佐藤彰一氏が代読し、ここにその原稿を取録することができた。

この研究集会の名古屋大学側の窓口は高橋亨が担当した。そのために事前の準備を進め、2008年9月にはプラハに行き、カレル大学日本学科の人々と相談の上で計画を進めた。当初は、日本語テキスト解釈の研究と教育をふまえ、大学院生も含めて異文化コンテキストによる解釈の差異という視点から討議することを考えた。日本の文学と歴史を主たる対象とし、言語学や記号学を根拠とした西洋のテキスト理論と、日本の文学作品や歴史叙述はどのように関係づけられ、そこに矛盾や齟齬は有るのか無いのか。研究方法として一般化できる共通性と、日本語の構造や言語観、歴史社会的な特性と関わる問題があるとすれば何であるのか。このような問題設定のもとに討議するというのが、カレル大学側との当初の協議における了解事項であった。

とはいえ、テキスト理論の単なる応用やその限界の指摘に終わったり、ともすれば国際会議にありがちな、ありきたりの比較文化論の枠を超えるために、「日本語テキストの歴史的軌跡——解釈・再コンテキスト化・布置」というテーマ設定がなされ、これが個別のそれぞれの専門領域における研究発表を共有するために有効だったのである。そこでは、研究方法として一般化できるテキスト理論による共通性と、日本語の構造や文化、歴史社会的な特性と関わる問題が、異文化コンテキストを対象化した二重化の必要性として見えてきた。

---

この国際研究集会の使用言語も、当初は英語と日本語として計画されたが、海外の会場で日本語のみで行われて、それが成功したことも特筆しておきたい。

カレル大学側の窓口は、その始めにおいては懐徳堂など江戸時代の思想史を専門とするヤン・シーコラ氏が担当してくださった。シーコラ氏もやむを得ぬ事情で参加できなくなったため、同じ日本学科のマルティン・ティララ氏が具体的な計画実現に奔走してくださることとなった。日本から帰国して三日目にかけて参加してくださったズデンカ・シュヴァルツォヴァー氏をはじめ、聴衆として、また会議の運営に協力してくださった大学院生など、カレル大学の関係者に深く感謝したい。

日本側の大学院生としても、名古屋大学のみならず、立教大学から青木慎一氏が自費で参加してくださったことにも感謝したい。

国際会議の常ながら、濃縮された新たな出逢いを今後に生かしていくことが、問題提起され残されている課題の解決のために、大いに期待される。

高橋 亨